

都城市議会議長様

提出日 令和8年5月7日

視 察 報 告 書

1, 会派名及び視察者名

公明 綿屋善明 音堅良一 坂元唱子

井川 誠（視察先の天空カフェジールは不参加）以上4名

2, 視察先・テーマ及び日時

・令和8年4月22日（水曜日）午前10時00分～16時00分

・宮崎市内で現地視察

3, 視察の内容

① 宮崎市自立相談支援センター「これから」

自立相談支援について

② 就労準備支援事業「かけはし」

就労準備支援について

③ 「天空カフェジール」の現地視察

就労準備支援の現状について

面談者

宮崎市福祉部福祉総務課重層的支援推進室 課長補佐兼室長

塩月 彩様

宮崎市福祉部福祉総務課重層的支援推進室 主査

中原琢磨様

宮崎市福祉部福祉総務課重層的支援推進室 主任主事

壺岐胡桃様

宮崎市自立相談支援センター「これから」ひきこもり支援事業「ひだまり」

野田彩加様

宮崎市就労準備支援事業「かけはし」 総括責任者

川越政邦様

「天空カフェジール」の代表及び経営者

福田久美子様

宮崎市自立相談支援センター「これから」 自立相談支援について

綿屋 善明

4、視察の感想

宮崎市では、生活困窮者に対し支援をする「自立相談支援」と、自立相談支援の支援員等を支援する「重層的支援推進室」（以下「重層」）とがある。「重層」には、「これから」で対応しきれないケースをいったん引き受け、庁内のどこへつなげばよいか判断する役割を担う。

今回の視察は、「庁内連携をよりスムーズにできないか」、との課題感から出発し、他市の事例を見たいとの思いから「これから」へ伺った。訪問した際、「都城市さんの方が先に行っている」と、宮崎市のご担当者様からお言葉を頂いた。視察前に本市福祉課から聞き取りをしていたこともあり、確かに、実施している内容は国の指導に従っているため似ている面が多いように感じた。しかしながら、1つの事業を本市と他市で照らし合わせる中で、新たな気づきを得ることができた。

今回、気づいた点として、次のような事柄が上げられる。1つ目は、相談者のたらい回しを防ぐため、「ワンストップ窓口」の設置が有効ではないか、との質問に、全国的にも「ワンストップ化」の流れではない。国も、その表記を削除した、との回答を得た。2つ目には、困窮状態にあるかどうか、市職員の担当者が見ただけで判断できにくい場合に、それを助けるチェックリストのようなものがあれば有益ではないか、と考えた。しかし、宮崎市様では、国が作成した「生活困窮状態を把握するチェックリスト」の活用を推奨しているものの、利用が進まない、とのこと。電話や同行案内などで、自立相談支援センターとつながるため、「気づき」のツールについて課題感を感じている、とのことであった。

宮崎市の自立相談支援センターや「重層」は、あくまで各相談窓口(担当部署)を補完するサブシステムの役割を担っている。そのため、もっとも当事者に接する現場のレベルアップを行うことに「重層」が力を尽くしている、ということが分かった。困窮者に気づくための補助ツールとして、チェックリストが機能していない、ということは、多種多様な状況が存在するともいえる。そうした、「ニーズ」に応えるためには、職員そのものの感覚、市民に対する関心度合いの高さ、引いては、倫理観やホスピタリティの深さ・強さが求められるものと感じた。

5、視察の成果及び市政への反映

先の「感想」を受けて、以下の項目を本市においても参考にすべきと考える。

第一に、現場を補完する立場の「重層的支援体制担当」を、「推進室」に格上げすべきだ。

本市には、市民生活に直結する担当課が少なくとも 42 課存在する。この数の相談を重層支援担当が一手に引き受けるのには無理がある。もちろん、他の担当や課長・副課長までフォローに入ると思われるが、それでも少ない。重層支援体制整備事業庁内連携会議の開催や庁内における連携課題に関する協議、情報共有等々、多くの課題に対応しながら、この取組をブラッシュアップするために、どれだけの時間と労力と情熱を費やせるだろうか。

第二に、職員の意識レベルの向上と、困窮者情報のデータベース化である。

宮崎市様からの聞き取りの中で、「困窮者に気づくための補助ツールとして、チェックリストが機能していない」との現状が確認できた。これは、本市にあっても他人事ではないと思われる。職員ひとり一人の気付く力が、生活困窮者を減らすことに直結する。そのために、各課内で、様々な事例をもとにどう対応するか協議を行うことだけでなく、そうした情報のデータベース化によって、担当者が異動になった際にも対応できるよう整備を進めるべきと考えた。

宮崎市自立相談支援センター「これから」

自立相談支援について

音堅 良一

4, 視察の感想

生活困窮の可能性のある方の把握については、宮崎市自立相談支援センターを中心に、各窓口で生活困窮状態の端緒となる事態を把握した場合は、本人の同意を得て庁内連携について説明し、情報共有する。

職員の教育については、重層的支援体制整備事業庁内連絡会議を設置し、連携課題に関する協議や情報共有等を行い、連携強化に取り組んでいる。支援者のサインや申請の無いケースのアプローチについては、支援者のサインとして、各窓口から税や水道代の分納相談があった場合は、自立相談支援センターに繋いで連携強化を図り、早期発見に務めている。

申請の無いケースは、本人周囲が困っている場合が多く、支援会議を開催して連携対応にあたっている。

ワンストップ化については、実現しておらず、各窓口に専門的な相談支援を補完するサブシステムの役割を担うことに重きを置いている。

連携強化については、「丁寧な繋ぎ」と「支援した経過のフィードバック」を大切にし、「案内するのではなく繋ぐ」という言葉で繋ぎ方を説明している。

自立や就労に至った件数については、令和 7 年度の総相談件数延べ 1228 件の内、生活保護申請へ 30 件で、自立へ 39 件であり、相談者の状況や特性に応じた就労支援や丁寧な債務・滞納整理の伴走支援が、相談者の物心両面の負担軽減となり、自立に向けた気持ちを引き出したと考えられる。

5, 視察の成果及び市政への反映等

宮崎市は、自立相談支援事業、就労準備支援事業、家計改善支援事業、ひきこもり 支援事業の 4 事業を一体的にワンフロアで実施することで、各事業間の連携の強化と、各委託業者の強みを活かした支援になっています。しかしこれは、ワンストップ化ではなく、各窓口で専門的な相談支援を補完するサブシステムの役割を担うことに重きを置いていることがわかりました。

連携強化については、「丁寧な繋ぎ」と「支援した経過のフィードバック」を大切にし、「案内するのではなく繋ぐ」という言葉で繋ぎ方を説明していること。

成果については、相談者の状況や特性に応じた就労支援や丁寧な債務・滞納整理の伴走支援によって、相談者の物心両面の負担軽減となり、自立に向けた気持ちを引き出したこと等、大変評価できることだと思いますので、本市に於いても、参考にすべきと思います。

宮崎市自立相談支援センター「これから」 自立相談支援について

坂元 唱子

4. 視察の感想

今回2度目の視察をさせて頂いたのですが、生活困窮やひきこもり、家計、就労など、複合的な課題を抱える方に対し、当事者やご家族等に寄り添いながら伴走型の支援が行われていると今回も実感いたしました。特に、税や水道料金の分納相談など、生活困窮のサインを各窓口で把握し、自立相談支援センターへ繋ぐ体制が構築されており、「丁寧な繋ぎ」と「支援した経過のフィードバック」大切にしておられ、庁内の研修等で「案内するのではなく繋ぐ」という言葉で繋ぎ方を説明されており、各窓口からセンターへ、センターから窓口への丁寧な繋ぎをお互いに実施するように周知しているとの事でした。関係機関同士が丁寧に連携しながら、支援が途切れない体制づくりが構築されていました。また、ワンストップの対応については宮崎市としては考えていないとの事で、各相談窓口の持つ専門的な相談支援を補完するサブシステムの役割を担う事に重きを置いているとの事でした。

早期発見・早期支援への意識の高さを感じます。相談者一人ひとりの状況に応じて、就労支援や債務整理、生活再建に向けた支援を丁寧に行うことで、自立への意欲を引き出している点は大変参考になりました。

5. 視察の成果及び市政への反映等

宮崎市では、自立相談支援、就労準備支援、家計改善支援、ひきこもり支援などを連携して実施し、それぞれの専門性を活かしながら支援体制を構築していました。

特に、「案内するのではなく繋ぐ」という考え方のもと、相談者を支援機関へ丁寧につなぎ、その後の経過も共有することで、支援が途切れない体制を築いている点は大変重要だと感じました。

本市においても、相談窓口の明確化と関係機関の連携強化を進め、生活困窮のサインを各部署で見逃さず、把握し早期に支援へ繋ぎ、繋いだ後の各関係機関との共有の仕組みづくりが必要であると思います。

相談者が孤立することなく必要な支援へつながる体制づくりが重要であると考えます。

宮崎市自立相談支援センター「これから」 自立相談支援について

井川 真

4. 視察の感想

今回、宮崎市の生活困窮者支援に関する取り組みについて視察を行い、支援を必要とする方を早期発見し、適切な相談窓口へ繋ぐための体制づくりについて学ぶことができました。

宮崎市では、重層的支援体制整備事業の一環として庁内研修を実施し、税務、福祉、子育て、教育など各部署の職員が生活困窮の兆候に気づいた際、自立相談支援センターへつなぐ仕組みを構築していることが分かりました。また、「生活困窮状態を把握するためのチェックリスト」や「連絡シート」などのツールも整備されていましたが、実際には電話や同行支援による連携が中心であり、ツールの活用が十分に進んでいないという課題も伺いました。このことから、制度や仕組みを整備するだけでなく、現場で活用される実効性の高い運用方法や、職員が日常業務の中で自然に活用できる仕組みづくりが重要であると感じました。生活困窮者支援においては、「気づく力」と「つなぐ力」を組織全体で高めていくことが必要であると感じました。また、ホームページ運営については、市民が必要な情報にたどり着きやすいように、検索性の向上やトップページから直接アクセスできる導線の整備を検討しているとの説明がありました。支援を必要としている方ほど、行政情報へアクセスすることに不安や困難を抱えている場合が多く、利用者目線に立った情報発信の重要性を認識しました。

今回の視察を通じ、生活困窮者支援は、単に相談窓口を設置するだけでなく、支援を必要とする方を早期発見し、適切な支援へ確実に繋ぐ仕組みと、市民が迷わず相談できる環境整備の両方が重要であることを学びました。都城市においても、庁内連携の強化や情報発信の充実を図り、誰一人取り残さない支援体制の構築に向けて取り組んでいく必要があると感じました。

5. 視察の成果及び市政への反映

生活困窮者の対応につきましては、複数の課の職員に関わって貰うことで、課題解決に導く事を心がけていると伺いました。また、8050 問題(80 代の親と 50 台の子供が同居し、特に子供が長期間引きこもり状況に陥っている)に対しての課題がある事の説明を受け、家庭内の問題だけでなく社会の問題として考える必要がある事を実感しました。そのため、自己責任で片付けるのではなく、地域で支え合う視点を持つ事が必要だと思えます。

就労準備支援事業「かけはし」 就労準備支援について

綿屋 善明

4、視察の感想

かねてから、ひきこもり状態にある方が社会に復帰するためのプログラムが必要であると感じてきた。宮崎市様は、政令指定都市ということもあり、いち早くひきこもり支援センターと共に、就労準備支援事業「かけはし」をスタートしている。障害者手帳を交付された方には、「就労継続支援 A 型・B 型」があり、それ以外の方は一般就労ということになる。この狭間にある、ひきこもり状態の方にとって、いきなり一般就労者として社会復帰は、清水の舞台から飛び下りる以上の勇気を要する。

「かけはし」の総括責任者は、市の職員ではない。民間支援団体に所属されている。長年、こうした事業に関わってこられてご経験から、当事者への接し方、関係団体との関わり方に長けているという印象を受けた。官民、それぞれが得意とする分野で支援を行っている、という姿が印象的だった。

5、視察の成果及び市政への反映等

長期間ひきこもり状態の方が社会に関わっていくには、との質問に、「まずは安心できる居場所を確保し、心のエネルギーを回復させることを最優先としています。」との回答を頂いた。親子同伴で面談に来所し、本人が望むペースで就労の準備にあたっていく。この生き方を良しとする空気を説明から受け取ることができた。こうした空気を社会全体で共有することが、引いては他者の生き方を受け入れる寛容な社会の拡大に貢献するものと考えている。

ただし、本市においても重層的支援体制整備事業の中で、こうした取組は少しずつ進んでいるものと認識している。とはいえ、「就労準備支援センター」という看板を掲げることで、当事者がとその家族が、より適切な支援につながる機会を増やすと期待できると考える。そして、それは、多様な価値観に目線を合わせ応援することのできる社会を創る一歩にもなり得ると思う。それは、「『自分も役に立てる』という自己有用感を段階的に育む工夫を凝らしています。」との回答からも伺い知ることができる。「看板」が必要である。それが、本市のあらたな市民活躍のステージを用意することにもつながっていくと思う。

就労準備支援事業「かけはし」

就労準備支援について

音堅良一

4、視察の感想

当事業の利用者は、主に自立相談支援センター「これから」の相談員や生活保護受給者のケースワーカーからの紹介に加え、今年度からは、多機関協働事業の申込者も対象となり、就労準備が必要と判断された方が繋がっている。

支援対象者の状況や能力を把握するためのカウンセリングに始まり、基本的な生活課題の克服や社会参加能力の形成に向けた各種研修、事業所内での軽作業やボランティアを通じた就労体験等、本人の状況に応じた段階的なプログラムを用意している。

途中で通わなくなった方や意欲が低下した方に対しては、電話や手紙、自宅への訪問(アウトリーチ)を粘り強く行い、まずは本人の不安や生活状況の変化を丁寧に聞き取ります。

定着支援については、概ね3カ月間実施し、職場環境への適応状況を確認しており、万が一、離職等に至った場合でも、受け入れについて検討し、孤立させない継続的なフォローを行っている。

5、視察の成果及び市政への反映等

利用者については、各事業所の相談員やケースワーカー、多機関協働事業の申込者などからの多大な情報が共有されて、「就労準備が必要と判断される方」へつながっていること。支援対象者の状況や能力を把握するためのカウンセリングに始まり、基本的な生活課題の克服や社会参加能力の形成に向けた各種研修、事業所内での軽作業やボランティアを通じた就労体験等、本人の状況に応じた段階的なプログラムを用意していること。途中で通わなくなった方や意欲が低下した方に対しては、電話や手紙、自宅への訪問(アウトリーチ)を粘り強く行い、まずは本人の不安や生活状況の変化を丁寧に聞き取りすること。万が一、離職等に至った場合でも、受け入れについて検討し、孤立させない継続的なフォローを行っていること等。以上の取り組みから、利用者を最初から最後まで寄り添う、伴走型支援が一番重要だということが分かりましたので、本市に於いても、参考にすべきと思います。

就労準備支援事業「かけはし」

就労準備支援について

坂元 唱子

4. 視察の感想

「かけはし」では、すぐに就労することが難しい方に対し、生活リズムの改善や対人関係の構築、自己肯定感の回復など、就労前の段階を大切にしたい支援が行われていました。

支援内容も、カウンセリングから軽作業、ボランティア体験まで段階的に用意されており、一人ひとりの状況やペースに合わせた支援が徹底されていました。途中で通えなくなった方に対しても、電話や訪問などアウトリーチを粘り強く行い、「孤立させない支援」を大切にされていることが強く伝わってきました。

また、就職後も定着支援を継続し、万が一離職した場合でも再び受け入れを検討するなど、切れ目のない支援体制が構築されている点に、安心して再スタートできる仕組みの重要性を感じました。

5. 視察の成果及び市政への反映等

「かけはし」では、就労だけを目的とするのではなく、まずは生活の安定や社会とのつながりを取り戻すことを重視した支援が行われていました。

利用者に対しては、一人ひとりの状況に応じた段階的な支援を実施し、途中で離れてしまった場合でもアウトリーチを通じて継続的に関わるなど、「寄り添い続ける支援」が徹底されていました。

また、就職後も定着支援を行い、離職した場合でも再び支援につなげる体制が整えられており、伴走型支援の重要性を改めて認識しました。

本市においても、就労支援だけでなく、その前段階となる生活支援や居場所支援、継続的なフォロー体制の充実が必要であると考えます。

就労準備支援事業「かけはし」

就労準備支援について

井川 真

4. 視察の感想

今回、宮崎市の生活困窮者支援の取り組みと、就労準備支援事業「かけはし」を視察し、支援を必要とする方を早期発見し、適切な支援へ繋ぐことの重要性を改めて認識しました。

宮崎市では、重層的支援体制整備事業のもと、庁内研修を通じて、各部署と自立相談支援センターとの連携強化に取り組まれていました。一方、生活困窮状態を把握するためのチェックリストや連絡シートの活用が十分に進んでいないという課題も共有されたことから、制度だけでなく、現場で実際に活用される仕組みづくりの重要性を感じました。

「かけはし」では、長期間ひきこもり状態にあった方に対し、まずは安心できる居場所を提供し、自己有用感を育みながら段階的に就労へと繋げる支援が行われていました。特に本人の特性や心理状態を丁寧に把握し、一人ひとりに寄り添った支援を実施している点が印象的でした。発達特性のある方への支援では、就職することを目的とするのではなく、職場体験や定着支援を通じて、離職防止まで見据えた取り組みが行われており、継続して働ける環境づくりの大切さを学びました。

今回の視察で得た知見を、本市における生活困窮者支援や就労支援、さらには誰一人取り残さない地域共生社会の実現に向けた政策提言に活かしてまいります。

5. 視察の成果及び市政への反映

生活困窮者、生活保護受給者のうち、一般就労へ進むことが難しい方を対象に段階的な就労支援を行う事業を行っています。主な目的としては、生活リズムの改善、社会参加への不安軽減、就労意欲の回復などを支援し、最終的に就労や自立に繋げることです。

第4期都城市地域福祉計画には、本市生活自立相談センターへの「新規相談数」300件以上と記されております。ので、解決に向けて真剣に取り組むべき問題だと思えます。

「天空カフェ ジール」の現地視察 就労準備支援の現状について

綿屋 善明

4、視察の感想

宮崎市南部、緑豊かな加江田地区の山手に「天空カフェ ジール」がありました。大きな建屋は、現在改装中のため客の姿はありませんでしたが、昼食の賄いをつくる方たちが厨房で仕事をされておりまして。

代表の福田久美子氏は、元々教員であったとのこと。様々なことで生きづらさを抱え、就労準備支援に通う利用者にとって、安心できる存在であると感じました。話の途中、アナグマが庭を駆け回る光景にも遭遇しました。利用者は、園の草取りをしたり、カフェ横の道を下った先にある田んぼで作業をしたり、それぞれが思い思いに活動されておりまして。昼食時間になると、総勢 20 名近くの方が一同に手づくりの食事をとる。この中で、少しずつ他者の視線に慣れ、距離感や空気感をつかみ、コミュニティの中で自分を出せるようになるのだろうと感じました。

一方で、運営費の捻出が大変難しいという印象を受けました。市は、こうした協力企業を支援する資金は確保できないようです。仮にできたとしても、国から委託される自立相談支援事業をどうにかやりくりするしかない、とのことで難しい財政事情を目の当たりにしました。

様々な企業で、人材難・なり手が不足している、と雇用面で困難を上げております。しかし、本市において、少なくとも 100 名のひきこもり状態の市民がいます。こうした方々に社会が関心を持ち正しく理解し、社会にチャレンジ・活躍できる仕組みを作り上げれば、本市の大きな労働力になることは間違いありません。航空業界で自社養成パイロットがいるように、本市においても、都城市人財養成プロジェクトを立ち上げ、本市にある人的資源を財(たから)とする取組をするべきである、と感じました。

5、視察の成果及び市政への反映等

「天空カフェ ジール」の利用者のうち希望者のみ、週に1度、綾町の農園で作業をし、そこで収穫できたもの同カフェで調理し利用者に提供する、とのことでした。加江田地区の山間で、自分のペースで作業し人と関わる。その次の段階として、少し遠いところで作業し、違った空気、違った環境、違った人間との交流によって、様々なパターンの人に触れていく。こうした、自分の心を鍛えていく作業をじっくり行える機会をつくることに就労準備支援事業の価値があります。本市にも、もちろんこうした就労準備支援に協力している企業があり、本市の社会福祉協議会が、そのために奮闘されておりまして。しかし、こうした事業を地域で担って頂いているのは、そう大きくない規模の資金を元手にした事業所だとかんがえております。そうした、事業者をサポートする仕組みを作らなければ、やがて行き詰まってしまう、という印象をうけ

ました。本市の就労準備支援に関わる事業所へ、行政は資金面のサポートを検討すべき、と提言していきたい、と考えています。

「天空カフェジール」の現地視察 就労準備支援の現状について

音堅 良一

4、視察の感想

宮崎市の「天空カフェジール」は、自然豊かな小高い丘にあるマクロビオティックカフェで、海、川、森を一望でき自然の中で心地よく過ごせる環境となっております。就労支援や地域住民や移住者の地域交流の場としての活動やワークショップの会場として利用されています。

特に就労支援については、就労体験の受け入れ先として、社会的な自立や復帰を26年間、担われており、平成27年の就労準備支援事業開始から見ますと、宮崎市自立相談支援センターの一番長い実績になっています。

厚生労働省の調査報告にも生活保護受給者等の就労体験受け入れ先として、実績があります。

5、視察の成果及び市政への反映等

「天空カフェジール」の代表及び経営者の福田久美子様は長年教員をされおり、退職後にカフェの経営を始められました。カフェは地域交流の場として重きを置き経営されているので、誰よりも地域には交流の場が必要との認識が強かったと伺いました。

こうしたことから、就労体験の受け入れ先として、社会的な自立や復帰を26年間、続けてこられたのは、生活困窮者の支援を行っている企業団体と自立相談支援員との相互理解がどこよりも強かったからだと思います。

本市に於いても、就労できる状態へ整えるための「つなぎ先」を克服しないと成り立ちませんので、自立相談支援員と活動を支援いただける企業団体等の相互理解を深めて頂き、活動を理解された「つなぎ先」を拡大していくことが、生活困窮者の支援には一番重要だと思います。

「天空カフェジール」の現地視察 就労準備支援の現状について

坂元 唱子

4. 視察の感想

実際に「天空カフェジール」の現地視察を行いました。

「天空カフェジール」は、自然豊かな環境の中で地域交流や就労体験の場として運営されており、地域に開かれた温かい居場所であると感じました。

特に印象的だったのは、就労準備支援の受け入れ先として長年活動을続けてこれ、利用者が安心して社会とのつながりを取り戻せるよう、地域との交流や実践的な体験を通して支援されており、「働く前の居場所」として大きな役割を果たしておられる点です。「天空のカフェジール」を利用されている方々の中には、最初はコミュニケーションを取るのが苦手だった方も次第に皆の輪の中に入り、一緒に食事をとり楽しく話をされていると伺いました。ここでの作業等を通して、新たな心の準備、そして何より自信につながっていると実際の雰囲気でも強く感じ、次への準備期間としてとても重要な支援であると感じました。

また、支援機関と受け入れ事業者との信頼関係が非常に強く、地域全体で支える意識が根付いていることも大変参考になりました。

5. 視察の成果及び市政への反映等

「天空カフェジール」では、地域交流の場としての役割に加え、就労準備支援の受け入れ先として長年活動을続けられており、地域における「つなぎ先」の重要性を学ぶことができました。就労に不安を抱える方にとって、いきなり一般就労へ進むことは大きなハードルとなる場合があります。その中で、安心して人と関わり、社会参加への一歩を踏み出せる場所があることは非常に重要であると感じました。

本市においても、支援機関だけでなく、地域企業や団体、居場所づくりを行う民間団体等との連携を深めながら、多様な「つなぎ先」を確保していくことが、生活困窮者支援やひきこもり支援の充実につながると考えます。

今回の視察を通して、支援は単独で完結するものではなく、「相談」「居場所」「就労準備」「社会参加」が切れ目なくつながっていくことの重要性を改めて実感しました。今後、本市においても、誰も孤立することなく、必要な時に必要な支援につながれる体制づくりに向け、今回の学びを市政へ活かしていきたいと考えます。

